

F. Scott Fitzgerald の長編小説に みられる色彩の世界

小林 資 忠
(英米文学研究室)

F. Scott Fitzgerald's Color Sense in his Novels

Yoshitada KOBAYASHI
(Department of English)

Abstract

Since Fitzgerald's revival in the 1950s, there has emerged a wide variety of critical essays which have brought to Fitzgerald's works more permanent crops of criticism. And so when we reread his five novels — *This Side of Paradise* (1920), *The Beautiful and Damned* (1922), *The Great Gatsby* (1925), *Tender Is the Night* (1934) and *The Last Tycoon* (1941) — in chronological order this time, we shall take notice of color words as a new approach, to which our attention has been scarcely called till now. We can consider how those color words function in each novel; words which have something to do with the theme and the background of the works. Also the personality, social status, and way of life of the characters. As Alfred Kazin once pointed out when he criticized works by Stephen Crane, the novelist is occasionally "forced to describe emotions in terms of color because the pressure behind so wholly concentrated a force drives him to seek unexpected and more plastic sources of imagery." (*On Native Grounds*, 1942, p. 71.) Kazin's opinion means that some authors can heighten the effect of imagery and suggestion in their works by using color words. Therefore, we intend to investigate the symbolism of some color words which manifest the high frequency or exercise an important influence upon the novels, relating them to the plot, the characters and the theme of the novels.

In the five novels, we notice that the author likes white most of all, and he gives most of the color words the dual meanings that seem to be opposite to each other, though this dualistic tendency is not necessarily confined to color words. It is also often said that the author had the dualistic use of language ability to permit both to function simultaneously in his mind. Though he led a dissolute life, he could observe, examine and criticize objects carefully and calmly just as a scientist does. And in describing the facts about upper-class

life, he would probably have perceived vanity or transiency in them. We can catch a glimpse of the characteristics of Fitzgerald's ambivalent way of conception. The author spreads depth and width of his style by looking at things from both sides which are incompatible.

[1]

F. Scott Fitzgerald (1896-1940) の再評価に関しては、1950年代以来その動きが盛んになり、現在では作家としての彼の評価もほぼ定着したと考えられる。そこで彼が残した5編の長編小説を年代順に再読するにあたって、今まで注視されることが比較的少なかった色彩語に着目して、それらの語がそれぞれの小説の主題や登場人物の生き方などと、どのように関係しているのかを考えてみることも興味深いと思われる。Alfred Kazin も *On Native Grounds* (1942) で Stephen Crane の作品を論じて「背後の圧力がすべて1つの力となり、彼を駆りたてて、予期しない、より豊かなイメージを求めさせたので、色彩によっていろいろな感情を描写しなければならなかった」と述べ色彩語使用の効用を説いたことがあった。この言葉は作家によっては、色彩語がその作品全体に大きくかかわってくる可能性があることを示唆している。

この小論では、Fitzgerald の5編の長編小説のすべてに共通して現れる色彩語12語のうち、紙数の関係もあり、各小説を特徴付け、主題と関連し、重要だと思われるいくつかの語を取り上げて作品の中での役割を考察してみよう。テキストは The Bodley Head 版を使用し、引用の最後の () の中に頁数を示す。

[2]

This Side of Paradise [以下 *Paradise* とする] (1920) は Fitzgerald の最初の本格的な小説であり、彼の生い立ちから23歳頃までの経験を踏まえて、彼の分身的な主人公 Amory Blaine の青春の喜びと苦悩を描いた作品である。この中には Amory の14歳から23歳頃までの女性遍歴を軸として、彼の青春時代の生きざまや当時の時代世相が忠実に反映されている。

この作品で最も多用されている white は New York の町にある建物や、学生達の服装に現れ、清潔感、若者達の学生生活に対する憧れ、彼らの純真さを示したり、Eleanor Savage の手や顔を white で表すことによって、清楚、純潔さを象徴している。しかしこの色彩には不吉なイメージもあって、Dick Humbird の死に顔を描写したり、Eleanor の性格にみられる野生味あふれる小悪魔的な様相を記述したりするのにも用いられている。

She was a witch, of perhaps nineteen, he judged, alert and dreamy and with the tell-tale white line over her upper lip that was a weakness and a delight. (217)

Grey は Amory が結婚を考えながら挫折感を味わう原因を作った Rosalind Connage の目の色や自動車事故を目撃する Amory の乗った車の色に用いられ、さらに彼が経験する恐怖や

Holiday 兄弟の目の色に現れて、不幸な前途と結び付き凶色の特徴が色濃く出ている。この作品の最終頁で、Amory は今までの自分の人生を振り返って冥想に耽り、新しい世代に思いを馳せて、これから続く不吉な混乱状態を grey で修飾して述べている点にも注目したい。

Here was a new generation, shouting the old cries, learning the old creeds, through a revery of long days and nights; destined finally to go out into that dirty grey turmoil to follow love and pride; a new generation dedicated more than the last to the fear of poverty and the worship of success; grown up to find all Gods dead, all wars fought, all faiths in man shaken . . . (270)

Blue は才色兼備の女性 Clara Page や、文学に没頭する Thomas Parke D'Invilliers の目の色に使用され、両者が未来に希望を抱き現在を幸せに生きている様子と結び付いている。そして彼らに接する Amory も幸福感に満たされるのである。しかし他方、この色彩は大学から Amory が受け取った成績不良を通知する紙片の色でもあり、また彼が New York から Princeton に戻る途中、ふと見付けたある墓地の地下納骨所に咲く花の色にも現れて、彼の感じる人生の終末の悲哀を暗示することもある。さらに彼が Isabelle Borgé を強く抱き締めた時、彼のワイシャツのボタンが彼女の首に当たり、“a little blue spot about the size of a pea” (95) を作ってしまい、人前を気にする彼女と気まずい仲になり、結局はこの出来事が2人の別れる遠因にもなる色彩である。

Golden は Clara の髪の色、Isabelle の美しさのほかに、夕暮れの輝き、Amory の Eleanor に対する情熱を表す好ましい色として用いられている。

Green は Amory の目の色に現れて、生命の躍動する活気、若さ、未来の希望を暗示するが、Eleanor の green eyes に映し出される “the infinite sadness” (213) を Amory 自身も共有しており、彼の青春時代の苦悩を含んでいるように見える。貧しい人々の部屋を Amory が想像した時も、不吉を暗示する yellow と共に、何が起こるかかわからない不安定で無気味な様相を green で表している。

He pictured the rooms where these people lived — where the patterns of the blistered wall-papers were heavy reiterated sunflowers on green and yellow backgrounds, where there were tin bathtubs and gloomy hallways and verdureless, unnamable spaces in back of the buildings; where even love dressed as seduction — a sordid murder around the corner, illicit motherhood in the flat above. (244—245)

Green の代用語 emerald が自動車事故の前触れを予知させる “Then tragedy's emerald eyes glared suddenly at Amory over the edge of June.” (91) として効果的に使用されていることも付け加えておこう。

Yellow は明るい暖かさを感じさせるところから、なごやかさ、落ち着き、厳かさを示すが、カフェーにいた奇妙な男の顔に代表される無気味さや、Amory を最後には裏切ることになる Rosalind の美しく輝く髪の色でもあり、人を惑わす不吉な色調を帯びている。

Brown は Isabelle の目の色に用いられて、彼女の悪擦れした性格をそれとなく示し、さら

に汚れ、不潔、気味悪さを表しながら、報いられない Rosalind への愛に苦しむ Howard Gillespie 青年の目の色にみられる悲しさも示唆している。この作品は Amory や他の若者達の抱えている各種の不安がテーマになっているが、それと呼応するかのように grey の頻度も高くなっていることに注意したい。

[3]

The Beautiful and Damned [以下 *Damned* とする] (1922) では主人公 Anthony Patch の生い立ちから青年期を経て、美貌の Gloria Gilbert との出会いと結婚生活を辿りながら、33歳に至るまでの彼の人生経験が詳細に語られている。この作品で grey はその使用例67のうち25例が“the grey house”⁴として現れている。この家は Anthony と Gloria が結婚後に暮らした Connecticut 州 Marietta という町にあり、遺産相続について祖父の心証を悪くした大宴会を催したことのある、不運を招く家である。この色彩は Gloria の目の色としても現れ、彼女の頑固な性格を“granite”と関連付けて強調すると共に、実りのない、すさんだ結婚生活を過す彼女の絶望的な暗い半生をほめめかす凶色のイメージを包含している。さらに作者は彼女の young とも old とも言える、はっきりしないしゃべり方を目の色の grey に結び付けている点にも注意したい。また Gloria の最大の関心事は自分の若さを保つことであった。しかしその若さが年と共に失われていくことに彼女は絶望とみじめさを感じるようになるが、その悲観性を将来に希望の持てる色彩 blue と対照させながら、grey によってそれを示しているのが彼女の次の言葉である。

“... Youth has come into this room in palest blue and left it in the grey ceremonies of despair, and through long nights many girls have lain awake where that bed stands pouring out waves of misery into the darkness.” (209)

White は不運を幸運に転じてくれる New York の小さなアパートや初めて Anthony のアパートを訪れた Gloria が着ていたドレスのほかに、Anthony が軍隊にいた時に知り合った女性 Dorothy の服装などの色に使用されて、清潔さ、清楚さを象徴している。一方この色彩は病的な白さも表し、無気味さ、不吉、恐怖、無慈悲さなどの概念を示したりもする。例えば Anthony が Gloria と住んでいた“the grey house”は動物に喩えられて、2人を獲物にしようと舌なめずりしている様子が white を伴って次のように描写されている。結局2人はその家で酒宴を催す快楽に負けてしまい、その家の餌食になって借用契約の期間を延ばしてしまうのである。

... they (=Anthony and Gloria) did sign the lease; to their utter horror they signed it and sent it, and immediately it seemed as though they heard the grey house, drably malevolent at last, licking its white chops and waiting to devour them. (207)

Blue は Anthony の目の色として用いられ、何不自由のない希望に満ちた人生を表したり、この色彩に囲まれた環境で生活している彼の幸福感が感じられる。また pink と共に使用され

て、幸せに膨らんだ甘い世界を特徴付けることもある。しかしこの色は陰うつさ、憂うつさのニュアンスを含むことがあり、死神の目、Gloriaのことを心配する母の目、Anthonyが経験した軍隊の営倉中での目の眩みなどにそれが含意されている。

YellowはRichard Caramel⁵の目の色に現れる。彼はAnthonyにGloriaを紹介し、2人が破滅の人生を送るきっかけとなった人物であり、作家としては成功し生活も安定しているものの、彼の作品は芸術的価値が低く、批評家の間では軽蔑の対象となっている。そのような世評が目の色に反映されているようだ。Gloriaは軽快な身振りや外観の美しさによって人を引き付けるけれど、彼女の髪はyellowで描き出され、男の気を引く世俗的な性格がrakishlyと共に表されている。

... and a small toque sat rakishly on her head, allowing yellow ripples of hair to wave out in jaunty glory. (61)

さらにこの色は憂うつな気分を誘因したり、外向的な華やかさを表に出しながら、不吉な予感も暗示するという特徴を持っている。

Blackは黒さ、暗さのイメージから邪悪、悲哀、憂うつなどと結び付くことが多い。また神秘性を湛えた悪魔的な魅力を振りまくと同時に、不安や不吉の前兆⁶とも関連している。Anthonyが入隊した軍隊では馬の蹄鉄を直すことも必要とされており、小柄なイタリア人Baptisteがその仕事の任務に選ばれた。彼はすでに馬に何度も蹴られており、その仕事には向いていないことを自覚し、恐怖感すら抱いていた。その予想は的中し、彼は黒い雌馬に頭をつぶされてしまう。

The horses seem to divine his fear and take every advantage of it. Two weeks later a great black mare crushed his skull in with her hoofs while he was trying to lead her from her stall. (297)

AnthonyとJoseph Bloeckmanの対立もこの作品では明らかである。もともとGloriaの奪い合いで敵対関係にあった2人であるけれど、AnthonyがGloriaと結婚してからも、彼女を映画出演にしきりに誘うので、Anthonyも彼のことをよく思っていない。Gloriaが29歳に近くなって、今度は自分の方から映画出演のテストを依頼して受けることにするが、Bloeckmanを通して前とは逆に断られることになる。その後、落ちぶれたAnthonyがBloeckmanに借金をしようと思ってパーティー会場に向かった時に、Gloriaのことで殴り合いのけんかになり、Anthonyは会場からたたき出されてしまい、みじめな気分を味わう経験をしている。このBloeckmanは最近Blackと名前を変えて、事業に乗り出していたのである。彼と接触すれば、誰にでも邪悪の影が降り掛かり、苦悩に追い込まれることがこの新しい名前によっていっそうはっきりとする。

Redは遠くからでも目立ち、人の情熱をかき立て、挑発する色彩で、時に低俗さ、危険性を含む場合もある。また若々しい活気を表したり、他の色彩と共に用いられて、若さを強調することもある。次の例では20代初めのredを伴った若々しい光輝くような美しい髪が、30歳近くになってその光が消え褐色を帯びてくる様子が説明されている。

... she sat upon the long lounge and began taking down her hair. It was no longer bobbed, and it had changed in the last year from a rich gold dusted with red to an unresplendent light brown. (372)

Pink は健康な人の皮膚の色であると共に食物や美しさなどの極致を表し、この色の服や帽子などを身に着けると、その人の外観を生き生きとすがすがしくさせてくれる。しかし一方では男性にみられる女性的めめしさを描写したり、Anthony の目にみられるアルコール中毒症の兆候を明示し、不健康な様子を表出する。アルコールで熱っぽくなった Anthony の目は赤味を帯び、小さな pink の筋が入っている。彼の本来の blue の目は危険性を象徴する red が加わることで pink になったと考えられる。つまりこの pink には健康で生氣あふれる兆候がみられないので、Gloria は彼の様子を old と受け取ったのである。

The feverish eyes he turned on her were traced with tiny pink lines that reminded her of rivers on a map. For a moment she received the impression that he was suddenly and definitely old. (371)

Green は草木の色であり、自然の風物とかかわり合って使用されている。青春を表す色でもあるので、老人と結び付くと、その人の元気盛んな若々しい姿が強調される。しかし若さ、未熟さから来る欠点として、嫉妬深さも暗示される色彩である。

Brown は世俗的な性格の持ち主を示すが、落ち着き、思慮深さ、堅実な生活ぶりにも関連している。一方この色はくすんだ色彩なので、マイナスイメージも持っており、若さを失った様子や、むなしさから来る悲しみを象徴することもある。

この作品では Anthony と Gloria の不安な生活や2人が貧しさによると言うよりも、富の所有によってかえって破滅していくその過程が綿密に描かれており、特に grey の色彩がそれを象徴している。

[4]

The Great Gatsby [以下 *Gatsby* とする] (1925) は語り手として Nick を登場させることで、作者の主観が直接介入しないように配慮がなされており、5編の長編小説の中では最も完成された作品として評価が高い。書名を決定する場合にも、作者は他にいくつか考えており、その中には色彩語の入った *Under the Red, White and Blue* という名称のものも含まれていた。これらの色彩語は明らかにアメリカの国旗を表す色であり、実際にこの作品の第4章にこの表現がそのまま用いられているのにも注目したい。この旗のもとにいるのは Daisy であり、*Gatsby* にとって彼女は緑の灯火であり“the American Dream”なのである。

最も多用されている white は47語みられ、他の色彩語、例えば blue や yellow の22語と比べて2倍以上の頻度になっている。真夏がこの作品の舞台になっているとはいえ、white がこの作品の基調色となり、大きな影響を持っていることは否定できない。登場人物の1人の名前となっている daisy は黄色い中心花の回りに白い舌状花を配した花で「無邪気、純潔、平和、希望」の象徴となっている。しかしこの作品では white が Daisy や Jordan と結び付く時に

は、「空虚さ、精神的退廃、不活発さ、はかなさ」などの含意を持っている。表面的な純粋さの奥には人を絶望や死へと駆り立てる無責任さが隠されている。次の例では有産階級に属している Daisy と Jordan の姿に *flippancy, emptiness* を想起できるだろう。

The only completely stationary object in the room was an enormous couch on which two young women were buoyed up as though upon an anchored balloon. They were both in white, and their dresses were rippling and fluttering as if they had just been blown back in after a short flight around the house. (25)

5年後に Gatsby が Nick の家で Daisy と 2 人っきりで再会することになった時、Daisy の色調 *white* に合わせて、Gatsby は “a white flannel suit, silver shirt, and gold-coloured tie” (84) の姿で Nick の家に急いでいる。また Nick も Gatsby のパーティーに出かけた時、一度だけ Jordan に合わせるかのように “white flannels” (51) の服装で出席している。しかし Jordan に対して批判的になっていく物語の後半では Nick はもはや白いスーツを身に着けることはなくなっているのである。

Blue は神学では空の連想から宗教心、潔白、無邪気、真実などを表すが、この作品ではそれらの連想をむしろゆがめる色としてしばしば用いられ、ある場合には宗教心の衰退や退廃を象徴することがある。荒廃した灰の谷を見つめる T. J. Eckleburg の目は *blue* で示されており、アメリカ文明の繁栄の中にみられる人間の心の不毛性、空虚さをほのめかしている。Tom の愛人 Myrtle は *dark blue dress* を身に着け、平和な結婚生活を乱すイメージを持つ。Gatsby を射殺して自分も自殺する悲劇的な人生を送った George の目は *light blue* であり、Tom のお気に入りの車も “a *blue coupé*” である。Tom は金持階級に属しているが、精神的に貧弱であり、無責任で残酷な性格を持っている。さらに Gatsby 邸に広がる *blue gardens* は Gatsby に恩義など感じない、ただ飲み騒ぐ楽しみを求める連中だけが集まる場所であり、そこに生える *the blue lawn* もそれに到達するために、あくせく苦勞して長い道のりをやって来たにもかかわらず、結局自分の夢がかなえられない Gatsby のむなしさを暗示するだけの場所にしかすぎない。それ故、*blue* は不吉、邪悪、不誠実のイメージと結合している。

Yellow は悪い連想と結び付くことが多く、状況によって *cream* や *brown* に変えられている。Gatsby のお気に入りの車は “a rich cream colour, bright with nickel” (68) とされているが、George や Myrtle の目には *yellow* と映っている。なぜなら George は Myrtle の愛人に対して、Myrtle は Tom の妻 Daisy に対して、それぞれ嫉妬や恨みを感じているからである。そして Daisy が運転していた Gatsby の車は Myrtle をひき殺す原因にもなっている。さらに皮肉なことに George と Myrtle が生活していた車の修理工場は灰の谷の端に位置する *yellow* のレンガ造りの小さな家であった。また風雨にさらされた T. J. Eckleburg の顔にも、*yellow spectacles* がかけられており、その眼鏡は東部社会で理想を求めながら失敗してしまう Gatsby や Nick をじっと見おろしている。灰の谷に住む George の自殺や Myrtle の事故死を我々が知るに至って、T. J. Eckleburg は死神の象徴と考えるとよいだろう。*Yellow* の variant として、次の文の *brown* は黄色い車を探し回り、それに引き付けられていく George の悲しい運命に喩えられる。

The hard brown beetles kept thudding against the dull light, and . . . (143)

Green は Daisy の邸宅がある栈橋の突端の灯火の色であり、Gatsby が求める夢、希望の象徴となっている。Nick はその緑の灯火をオランダの水夫達が初めて見た新大陸のイメージ “a fresh, green breast of the new world” (162) に重ね合わせている。さらに Gatsby の所有する車の内部は自分の夢の色 green で装飾されている。しかし小説の後半部ではこの色も徐々に色あせていくのがわかる。Myrtle をひき殺した車の色について、Michaelis は light-green だったと述べている。Green は死のしるし、Daisy の不誠実、裏切りの連想を持つものへと変貌し、George の生気のない顔色も green と描写されている。Myrtle という名前も “trees with evergreen leaves, white or pinkish flowers”¹⁰ という植物の名称であり green と密接に結び付いていることも指摘しておこう。

Grey は Myrtle が Tom や Nick と共に、New York の自分のアパートに戻る途中で乗ったタクシーの内装の色として “a new one, lavender-coloured with grey upholstery” (39) と使用されている。外装の lavender と内装の grey という淡い色合いの調和によって、Tom との愛人関係を温存させたいと願う女心が現れているようにみえる。この場合、grey は lavender との共起によって Myrtle にとって好ましい色合いを持つ色彩となっているが、やがて彼女は Daisy の運転する車によって命を落す悲運に遭遇することになり、grey が暗示する不吉さの射程内に入っているのである。また grey には George が妻に対して持つ疑惑が感じられると共に、もう 1 人の登場人物 Jordan と結びついている。灰色の目をした Jordan は自分の利益になると考えると、不正な行為も辞さない疑惑に満たされた女性である。この作品で grey の最も大きな機能は a valley of ashes と緊密につながって、荒廃した土地の汚れや塵の積った状況を強調し、東部社会にうごめく人間の心の退廃と不毛性を示唆するのに役立ったことであろう。このような環境の中で、Myrtle の死によって絶望的になった George は “the ash-grey phantom”¹¹ になって、Gatsby とともに死へと旅立つのである。

Pink は Gatsby の着ているスーツの色に関連している。しかし彼は最初から pink のスーツを着ていたのではなく、Daisy と最初に Nick の家で会った時は “a white flannel suit” (84) の装いであった。場所を自分の邸宅に移して、2人が窓を通して空を見上げた時に “a pink and golden billow of foamy clouds above the sea” (93) がたまたま目に入る。まさにこの時、Daisy が偶然に述べた次の言葉が Gatsby の脳裏に刻みこまれたのである。

“I’d like to just get one of those pink clouds and put you in it and push you around.” (93)

Gatsby にとって pink は Daisy の言葉の中にあった色彩であり、自分の夢の延長でもあった。Daisy の意見に従って、彼女への愛を込めた pink のスーツを着た Gatsby の姿は Tom の目には俗悪に見え、いかにも成り上がり者であるような感じがしたわけであるが、Gatsby は真剣そのもので、Daisy の願望に誠実であろうとしたのである。しかし Gatsby のこの満足も Myrtle の死後は、Daisy の不誠実さのために色あせて、pink のスーツもただのぼろ着に成り下がってしまう。

His gorgeous pink rag of a suit made a bright spot of colour against the white steps. (141)

このようにこの作品は *Gatsby* の一途さと Tom や Daisy の腐敗した心との見事な対比が我々の心を捕らえて離さないであろう。

[5]

Tender Is the Night [以下 *Night* とする] には1934年に出版された初版と Malcolm Cowley が作者の残したメモに従って編纂した1951年の改訂版とがあるが、ここでは The Bodley Head の初版を使用する。

White はまず女性主人公 Nicole と関係しており、精神科医 Dick は Nicole の「白いテニス用スカート」(167), 「色白で生き生きした顔付」(178), 「白っぽい金髪」(79) に好感を持つ。しかし Tommy と再会して、Dick を裏切り、Tommy に抱かれている Nicole の目は正常な green から white に変化している。その時 Tommy は次のように述べている。

“I thought I knew your face but it seems there are some things I didn't know about it. When did you begin to have white crook's eyes?” (319)

Dick から離れ、自立の道を歩もうとする Nicole の決意と共に、夫に対する裏切りの、後ろめたい気持がこの目の色に混在している。Tommy から自分の目の色のことを聞かされた Nicole はそれを正当化しようとして次のように熟考する。

A little later, riding toward Nice, she thought: So I have white crook's eyes, have I? Very well then, better a sane crook than a mad puritan. (321)

お上品な狂気の puritan より、夫を裏切りもするが、奔放で正気の悪漢の方がよいと考えるまでに Nicole の心は自立してきている。また white は sane に通じると Nicole は考えており、Tommy との語りによって、自分の罪や責任を投げ出して、自分の未来を考える喜びさえ持つようになっていく。そして Dick から完全に離れ、自立心の確立した Nicole の目は最上級の white で表されるまでになっている。一方 Nicole と離婚し、アメリカに戻った Dick は各地を点々と移動するだけで、今までの Nicole との生活習慣から容易に抜け出せないで、苦悶している。Dick の半生は Nicole の white の目に翻弄されたと言ってもよい。

Blue は Dick の目の色に使用されている。彼は人が困っている時には援助を惜しまない、親切心を持った寛大な人物で、それが目の色に映し出されている。また Nicole が Dick と結婚する前に着ていたドレスはクリーム色であったが、歩くたびに blue と grey が交互に入れ替わるものであった。この色彩変化によって、正気と狂気を繰り返す不安定な Nicole の精神状態がそれとなく表されている。Dick がほっと落ち着く blue の世界から Nicole の姉 Baby Warren の支配する yellow の世界¹²へ入って行く途中で通り抜けるのは、細長い yellow の天井の付いた栈橋であることにも注目したい。

On the long-roofed steamship piers one is in a country that is no longer here and not yet there. The hazy yellow vault is full of echoing shouts. (228)

つまりこの後、Dick が Rome で些細なことでタクシー運転手とけんかをし、警察に連れて行かれ、そこで憲兵と殴り合いをして大けがをし、拘置所に入れられる事件が続き、不運を経験するからである。そして事もあろうに yellow の世界の主、Baby に奔走してもらってこの危機を脱し、その結果、Dick は完全に Baby の支配下に入ってしまうのである。さらに yellow は Nicole の狂気の発作とも結び付いている。女性患者のことで、Nicole が Dick のことを邪推していたとはいえ、博覧会場で彼女が突然走り出したことがあった。

Far ahead he saw her yellow dress twisting through the crowd, an ochre stitch along the edge of reality and unreality, and started after her. (211)

狂気の色である yellow の服を着た Nicole が狂気に駆られて人込みを縫って行く姿が yellow の針の目として描写されている。この yellow を媒介にして、Dick は完全に Nicole の世界に同化されてしまったのである。

Green は Nicole の目に現れ、彼女の精神が安定している兆候を示すが、同時に血の red と混合して yellow に転じ、彼女を狂気に駆り立てる一面も持っている不安定な色である。Dick が Sepoys のかぶった帽子のことを “The green hat, the crushed hat, no future” (296) といみじくも言ったように、この色には未来がないように見える。

Grey は Nicole の目に残る狂気を示す色であり、この色によって彼女の意気消沈、無気力、無関心が表される。また罪深い Nicole の父 Devereux Warren の目の色でもあって、何か捕え難い病的な性格を表している。

[6]

The Last Tycoon [以下 *Tycoon* とする] (1941) は作者が1940年12月21日にコラムニストの恋人 Sheilah Graham の部屋で心臓発作のため急逝した時に残された小説である。 *The Great Gatsby* の成功を再現しようと一人称の語り手である20歳の Cecilia Brady を登場人物に加えて話を進めている。未完のこの小説の残り6頁 (pp.303-308) は作者が書き残した notes や outlines に基づいて、この作品について話し合いをした人々の報告によって、Edmund Wilson が要約しまとめたものである。

この作品で頻度の高い silver は主人公 Monroe Stahr の亡き妻 Minna Davis にそっくりだと Stahr が思い込んだ女性が身に着けていた belt の色として最初に現れる。捜し当てたその女性は Edna という売春婦で、彼女の友達 of Kathleen が Minna に似ていたその人であることが明らかになる。銀幕の女優が silver の光を受けて輝くその雰囲気 Stahr は Kathleen の中に見て取ったのである。また建築中の彼の邸宅で Stahr が Kathleen と過したある晩、丁度満月の満潮時に当たり grunion が銀鱗をきらめかして、浜辺に打ち上げられるのを2人が目撃する場面も適切に準備されている。その銀色に輝く魚の1匹は最後に撮影所の外に1人取り残される Kathleen をまさに暗示している。その後 Stahr の車の中で Kathleen が紛失した手

紙を偶然に Stahr 自身が見つけて、彼女があるアメリカ人との結婚を考えていることを知り、心に動揺を覚える出来事があった。その時の彼の気持は銀色の魚が海に押し戻される描写を加えることによって、より現実味を帯びて彼に迫ってくる。空も先程までの満月による銀色の輝きを失い、風と雨のいやな天候に変わっていくのと時を同じくする。

And Kathleen departed, packing up her remembered gestures, her softly moving head, her sturdy eager body, her bare feet in the wet swirling sand. The skies paled and faded — the wind and rain turned dreary, washing the silver fish back to sea. (270)

もちろん Kathleen の心もこの時はまだ決定したものではなく、Stahr の積極的なプロポーズがあれば、その方に傾く心境であった。そのどっちつかずの不安定な彼女の心持ちを次の2つの色彩を並列させることによって巧みに作者は表現している。

Kathleen waited, irresolute herself — pink and silver frost waiting to melt with spring. (290)

Pink は Stahr が Kathleen に対して示す好意的で、希望あふれる愛を持った彼の心を、一方 silver は white に通じ、その同じ Stahr が過去にこだわって、彼女に結婚の意志表示を明確に伝えようとしないう冷たい彼の心を象徴しているように思える。

White は Kathleen の背景を構成し、彼女の清楚さと共に神聖さを形作る色彩として機能しながら、月光や照明と結合して明るさを強調するのに用いられている。¹³ またこの色は不安、悩み、老齢、軽蔑などの連想も持っている。

Red は革命的なニュアンスを持ち、登場人物の積極性やエネルギーを明示している。語り手の父である野心的な Billy Brady やかつて大映画会社の社長であった Mr. Schwartz の性格にぴったりと当てはまる。

Black は黒人の色を示す他に、不吉や敗北にも通じ、犯罪を表すと共に、人が持つ神秘性も含意している。

Green は木々、コケ、土地などを修飾するが、他方では人の羨望や嫉妬、さらに生命の躍動する活気や若さも表す。

Blue は空の青さの他に、純粋さ、真実を表し、心を和らげる色であるが、rose と交わると purple となって、非難や軽蔑の意味を含むことがある。¹⁴ Kathleen のかぶっていた“the rose-and-blue hat” (258) によって、彼女が2人の男性の間で揺れる、不安定で打算的な気持を持っていることに対する非難がそれとなく示されているように思える。

Kathleen is a sophisticated, worldly woman who never loses sight of her lowly origins, her early scramble for survival.¹⁵

Grey は語り手である Cecilia の目の色として現れており、陰謀を企てることもあえて辞さない彼女の一面を暗示しながら、彼女の希望の持てない人生と緊密に関連している。

Brown は Stahr の目の色として用いられ、彼の人生の悲しみや不毛性を象徴すると同時に、Kathleen の巻き毛の色も示し、風になびく不安定な悲哀に満たされた半生を表している。

〔 7 〕

5編の長編小説について、それぞれの作品を特徴付ける色彩語に焦点を当てて、その役割や登場人物との関係などを考察してきたが、特に white と green には5つの作品全部において、プラスとマイナスの両イメージが混在しており、ambivalent な兆候を色濃く持っていることがわかる。Blue は *Paradise, Damned, Tycoon* において、yellow は *Paradise* と *Tycoon* において、pink は *Damned* と *Gatsby* において ambivalent な色彩効果を持っている。相反する心の葛藤の中で、その両方に力点を置いて物事を判断し、文体に厚み、幅、奥行を増す努力を作者がしているわけである。また5編の長編小説では white が群を抜いて多用され、作者の最も好む色彩であると考えられる。各小説の主な色彩語の使用傾向を簡単にまとめると次のように言えるだろう。

Paradise では Amory や他の若者達の青春の輝きと不安に white と grey がそれぞれ用いられ、blue によって彼らの希望と幸福感が表されている。

Damned では grey が不運を招く家や、主人公達の暗い半生を暗示する凶色のイメージを表すのに効果を発揮している。一方 white によって、幸運をもたらしてくれる物や Gloria と Dorothy に使用され清楚さをほのめかすと共に、病的な白さ、不吉、恐怖などを象徴している。

Gatsby では white が Daisy や Jordan と結び付き、表面上の無邪気さ、純粋さを表すと同時に心の底にある無責任さを象徴するのに使用されている。

Night では white が Nicole の自立を意味する目の色として用いられているが、この色彩は Dick に対して、不貞を働いている彼女の後ろめたい気持も含意されており、Dick にとっては人生を狂わせる不吉なイメージを持つ。Blue は Dick の目の色であり、blue の世界は彼がほっと一息付ける憩いを示唆する色彩である。

Tycoon では silver がその輝きによって Stahr の心を支配する一方で、white と black がその対照によって明暗と正邪を作り出し、作品全体に人を引き付ける不思議な魅力を与えている。

最後に5編の長編小説に共通して出て来る色彩語12語の頻度を参考のため次に記しておく。

	white	blue	grey	black	yellow	red	green	brown	pink	golden	silver	gold
<i>Paradise</i>	36	35	33	26	14	13	20	15	9	23	5	5
<i>Damned</i>	61	40	67	33	38	26	15	14	16	9	8	15
<i>Gatsby</i>	47	22	17	11	22	9	17	7	6	5	11	10
<i>Night</i>	60	37	15	28	13	22	19	10	11	4	5	8
<i>Tycoon</i>	11	8	8	13	5	11	9	5	3	2	13	2
TOTAL	215	142	140	111	92	81	80	51	45	43	42	40

(注)

- 1 Alfred Kazin, *On Native Grounds : An Interpretation of Modern American Prose Literature* (New York : Harcourt, Brace and Company, 1942), p. 71.
邦訳, 杉木・佐伯・大橋ほか共訳『現代アメリカ文学史』(東京:南雲堂, 1964), pp. 82-83.
- 2 Savage という姓はこの女性の性格にぴったりと符号し, Allen も “an apt surname for this wild and curious creature” と述べている。 — Joan M. Allen, *Candles and Carnival Lights : The Catholic Sensibility of F. Scott Fitzgerald* (New York : New York University Press, 1970), p. 80.
- 3 Brown は「悲しみ, 不毛」を象徴することもある。 — 山下主一郎ほか共訳『イメージ・シンボル事典』(東京:大修館書店, 1984), p. 87.
- 4 この家は「フィッツジェラルド夫妻が1920年5月から同年末まで住んだ Westport の grey house である。」 — 小堀洋一郎『スコットフィッツジェラルド——人と作品』(東京:弓書房, 1987), p. 87.
- 5 Richard Caramel, a “natural born fetish-worshipper,” contributes to the debasement of art until his name becomes a “byword of contempt.” — Rose Adrienne Gallo, *F. Scott Fitzgerald* (New York : Frederick Ungar Publishing Co., 1978), p. 31.
- 6 Anthony sees darkness as an omen of evil. — Dan Seiters, *Image Patterns in the Novels of F. Scott Fitzgerald* (Ann Arbor, Michigan : UMI Research Press, 1986), p. 31.
- 7 山下主一郎ほか共訳, 前掲書, p. 498.
- 8 A. T. Crosland, *A Concordance to F. Scott Fitzgerald's The Great Gatsby* (Detroit : Gale Research Company, 1975), pp. 403-405.
- 9 Rose Adrienne Gallo, *op. cit.*, p. 148.
- 10 D. B. Guralnik, *Webster's New World Dictionary of the American Language* (Second College Edition) (New York : William Collins and World Publishing Co., 1978), p. 941.
- 11 Brian Way, *F. Scott Fitzgerald and the Art of Social Fiction* (London : Edward Arnold Ltd., 1980), p. 104.
- 12 “From the yellow glint in Baby's eyes, Dick saw she was listening.” (195) の文からわかる。
- 13 Seiters も moon と light の関係を “. . . the moon provides the major light source in *The Last Tycoon*.” と指摘している。 — Dan Seiters, *op. cit.*, p. 124.
- 14 赤池鉄士『英語色彩の文化誌』(東京:研究社, 1981), p. 24.
- 15 Rose Adrienne Gallo, *op. cit.*, p. 114.

(1992年4月27日 受理)